

ソニー創業者の井深大は、戦後日本が科学技術で復興するためには、理科教育こそ重要だと考えていました。井深は日本初のテープレコーダーやトランジスタラジオを発売し、会社経営がようやく軌道に乗り始めた1959年に、「ソニー小学校理科教育振興資金」の贈呈を始めました。

当時の贈呈式当日に、井深大から受賞校の先生方へ贈ったメッセージをご紹介します。

※内容および名称・肩書等は当時のものです。

## 第9回（1964年） ソニー小学校理科教育振興資金贈呈式

### 「種をまき 芽を育てる一助に」 井深大 ソニー株式会社社長（当時）

最初に、本日の贈呈式には関係ありませんが、理科教育振興資金の審査をしていただいております茅先生（当時、東京大学学長）が、皆さまもご存知のようにこのたび文化勲章をお受けになることになりました。これは当然のこととは言いながら、非常に榮譽あることと思いますので、皆さまとっしょにお喜びを申し上げたいと思います。

#### 科学に対する関心を国民全体に

本日は遠いところをお集まりいただきまして心からお礼を申し上げます。今年も多くの学校から選ばれた皆さまに、わずかではありますが理科教育振興資金を贈呈できますことは、私ども非常に光栄に思います。

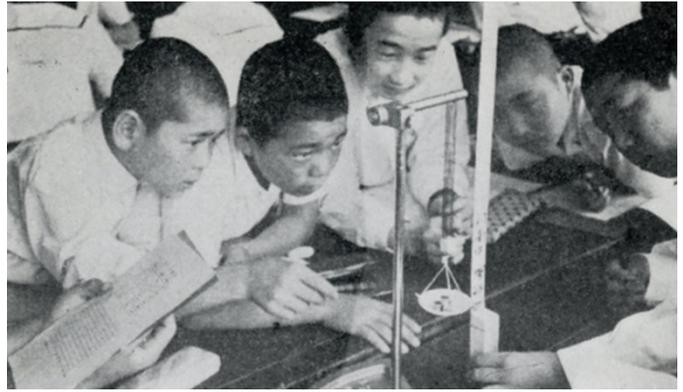
本年は152校という多数の応募があり、特に内容の充実したものばかりでしたので、どれを推していいのか困るというのが実状でした。このように立派な成績、成果をおさめた皆さまの努力に対してささやかではありますが、お報いできることは、私ども非常に嬉しく思います。

先日来、日本中がオリンピックということで大騒ぎをしました。日章旗は予想以上にあがりましたが、陸上と水泳においてはさっぱり日の丸があがらなかった。これに対しては「日本の選手の層が薄い」ということが盛んに言われました。

私はこの層の薄いということに大いに着目しなければならないと思います。日本ではいろいろとすぐれたものがでております。特に工業関係、学術関係、科学関係などで際立ったものがでております。しかしそれらは平らなところに木がぽつんぽつんと生えているだけであって、けっして全体の大地が高くはなっていないというのが日本の現状ではないかと思えます。それはまた、層の薄いということに起因しているのではないかと考えます。

この理科教育振興資金の企てに対して、ある先輩の方が「小学校の理科なんか振興しても、すぐに日本の役には立たないのではないか、それよりも大学とか研究所でやっている研究に振興資金を出したら、もっと早く効果が現われるのではないか」という忠告を受けたことがありました。

しかし私はかえりみまずに、戦争が終わって、あの焼け野原からすでに20年経とうとしています。教育において20年という年月はけっして短いものではありません。しかし時間というものはいつの間にか経ってしまうものです。



「明日の理科教育のために 第9集（昭和39年11月発行）」より

したがって、今こうして種を植えておくことが、やがて20年、30年先に立派に芽を出してくれるものと期待できると思います。そこで科学の面、あ

るいは工業の面においても私はできるかぎり日本の層を厚くしておきたい、どんなへき地へ行っても科学というものが国民ひとりひとりの頭の中に沁み込んでいったなら、そうした中から日本の将来を背負って立つ者が生まれて来るものと思います。

こうした見地からしても、皆さまのなされた仕事と努力というものは高く評価されてもいいと思います。それはけっして、一つの小学校、中学校だけの問題ではなく、日本を背負っていく大きな基礎になるのではないかと思います。

### 世界に通用する独創性を

かえりみまずと、日本の産業は明治維新以来、模倣ばかりを続けてきたように思います。その模倣も今日までは通用してきました。しかし貿易自由化となった現在、模倣では世界に通用しなくなりました。このような情勢にあって、これからの日本は世界にのしていかなければならないと同時に、世界のいたるところに日章旗を掲げていかなければならない立場に置かれています。それにはどうしても独創性、特殊性というものが必要だと思えます。それはやはり、幅の広い厚い層から生まれてくるものでなければ本物でないと思えます。

いかにすぐれた発明や考案が生まれ、それを裏付ける工業の力というものが国民全体の科学に対する関心の上に築き上げられるものでなくてはならないと思えます。

このような意味で、私どもの企てが少しでも役に立っているとすれば、たとえ今すぐに効果は期待できなくとも、日本の将来のためにできる限りのお力添えを続けていきたいと思っております。

最後に、この審査にあたりまして貴重な時間をさいて、真剣に取り組んでいただきました三先生<sup>(※)</sup>方に心からお礼を申し上げます。

※三先生： 当時の審査委員である茅誠司氏（東京大学学長）、篠原登氏（科学技術庁次官）、内藤誉三郎氏（文部省初等中等教育局長）のこと